

1992年2月 (題字・藤馬龍太郎筆)

4 回 生

七月の半ばぐらいだったようです。就職先の内訳は、五十人中、金融が十六人、メーカー九人、公務員五人、マスコミ、エネルギー、教育が各二人、商社、サービス、住宅等が各一人。そして大学院進学が二人。昨年に比べても、かなり多方面に広がっています。

今後、私達が社会に出れば、ゼミの先輩方が色々なお世話になることと思います。その際はどうか宜しくお願い致します。簡単ですが、以上で四回生の活動報告とさせていただきます。

(88年度生)

(87年度生)

A decorative illustration of cherry blossoms and branches, located at the bottom right of the page.

勉強会を開いていました。光塩館の先生のお部屋を貸していただいたことも多かったと思います。勉強が終わると、先生は「コーヒでも飲みに行こう」と言ってくださり、先生が以前勤めておられた国立国会図書館のお話などを興味深く聞かせていただいたものです。

卒業後は、藤馬会を通じて多くの方を知ることができました。ゼミは、大学生で得ることのできる大きな財産です。藤馬会というこの財産が、今後どんどん大きくなることを願っています。

(77年度生)

(77年度生)



一昨年の暮れ十二月十七日から昨年三月十七日まで三ヶ月間、わたしは主にパリとロンドンで在外研究の機会をもった。かつて一九七八・七九年の一年間、南仏エクス・アン・プロヴァンスで過ごした在外研究から十二年ぶりである。最初の一月は、実に三十八年ぶりの独身生活をエッジョイすることができた。その間に懐かしいエックスを訪れて、旧知と再会して旧交を温めたり、マルセイユに足をのぼして旧港にたずねて、そこで出会った人々との過ぎし日を回想したり、また大いに羽根をのばしてパリを歩き廻ったりもした。

で午前九時二十五分着の予定である。息せき切つて入り込んで空港到着便の掲示板をみると、これが全便軒なみに「Retardé」(延着)とある。なかでもアメリカや中近東発の便は例外なくすべてキャンセルである。一時間以上も待つても一向にどの便もランデブーしない。空港ロビーもなんとも異様な雰囲気である。例の、粋な帽子のスマートなお巡りさんもベアでやたらと巡回し、空港従業員の態度も心なしかかたいた。そのうちにラウンジのテレビが早晩、戦争状態に入ったことを報じ、やつと事態の重大さに気づくことができた。民間航空機の飛行は危険であるから最寄りの空港止まり、なんてことになっ



パリでの滞在近地にあるヴィット・シヨール公園入り口の雪景色をバックにする藤馬教授ご夫妻

義で、ワイシャツの胸ポケットに納まる学生手帳をもっぱら愛用している。しかし、在外生活のときだけは、かなり筆まめに日記をつけることにしている。この日記をたよりにパリ・生活の断片を書いてみよう。

ては妻との連絡のとりようもない。さて困ったことになったわい、と思つてもどうしようもなく、暫く様子をみるほかない、と覚悟をきめて待つこと約三時間。やつと疲労感を漂わせながら妻が到着。デュッセルドルフですつと機内待機させられたという。かくしてわれら夫妻のパリー滞在は、湾岸戦争とともに始まり、三月一日、ロンドンに向けて出発する(この日、戦争終結)までデパートやスーパーに買物のため入店するにも丁重な態度ながら、厳しいボーディーチェックや所持品検査を受けるといった緊迫した臨戦体制下の生活(日本



エディット・ピアフはこのアパート入り口近くの階段の昇り口で誕生した

日記を頼りに印す 3ヶ月間の思い出

同志社大教授 藤馬 龍太郎

影がある。近くには、懐かし

歌つても、聴衆の涙を流させることができたろう。といわれたエディット・ピアフの数奇な人生の誕生地でもある。学生時代、わたしはひととき、ジャン・ドゥ・パリに狂った。「ジャン・ソンの父」といわれ、ジャン・コクトーは「歌う狂人」と絶讃したという、シャルル・トレネや「パリーの女王」と称され「パリー育ち」という歌で「だまそうたつてダメよ。私はサンドニ大通りに生まれたパリス子だもの」とうたつたミス・タンゲット、そしてとりわ

「土産」いっぱい12年ぶりの在外研究

では到底、想像もつかないであろう(うが)を体験することになった。

(一) 単身生活の一ヶ月間、わたしは、殊更パリーのダウン・タウンで生活してみようかと決心して、知る人ぞ知る貧しい庶民の街であるメル・モンタン界隈のベル・ヴィル(Belleville)の近くに「美しい街」というその名に反して、ここベル・ヴィルは二〇世紀半ばまで、いや、つい近年までパリーのもつとも貧しい人達がたむろする街として有名である。住民はアラブ人、トルコ人、旧仏領植民地の人々、そしてここは、パリーの二大中国人街の一つといわれるだけあって、中国人の多いこと。しかし、ここには往年の旧き良きパリーの面

のフランス映画「北ホテル」(ルイ・ジュヴェ主演)の舞台となったサンマルタン運河とHôtel de Nordがある(しかしパリでも文化財をめぐって保存か開発かで大論争、やつと北ホテルの建物の保存が決定して、只今、大補修中)。わたしはこのベル・ヴィルの急坂を登りつめたところにある、しかし日本人、とりわけ観光旅行者には全く知られていない、広大な美しい(昔はパリーの石切場であつた)公園ウィット・シヨール公園(Parc des Buttes-Chaumont)の近くに部屋を借りて、ここから国立図書館やコンセイユ・ユネスク(参事院)Mediatek(オムズマンのフランス型)事務局に通うことにした。この街はまた「ジャン・ソンの女王」といわれ、電話帳を

け、ピアフのはりきげんばかりの歌唱と、詩にみごとなまでに人生の凄絶さと、感情をうたい込むその唱歌法にいたく感動したものであつた。エディット・ピアフは生前の熱狂的な名声とその生まれと死の劇的であったこと、人々の胸中に今も生きて、人々の胸中に彼女が生きたベル・ヴィル街二番地は、わたしのフラットから歩いて十分とからないう急坂の途中にある。その半ば傾きかけ、黒くすんだアバルトマンの玄関口の階段の上で、ピアフは一九一五年十二月十九日の早朝、呱呱の声をあげたのである。曲芸師一家の貧しきから、産院に入れず、産氣をもよおして母親がうずくまつた冷たい石の階段の上に、通りかかった

後、数年経って、ベル・ヴィルの場末の酒場や辻に、幼い妹づれの少女の唄声が流れ、貧しい人たちのなげなしの財布からの小銭のめぐみで命をつないだ少女がいたという。この少女が後年のエディット・ピアフであつた。多くの激しい恋をし、そして破れて短い四十九歳の生涯を閉じたその日に、彼女の才能を高く評価し、彼女をいづくしんだジャン・コクトーが、まるで後を追うかの如くに息をひきとつた。マルセイユで貧しいイタリア移民の子として街頭でオレンジ売りをしていたあのイヴ・モンタンは、ピアフの引き立てによって世に出たが、その彼も昨年暮れに世を去った。ベル・ラシェーズ(ベル・ヴィルに近い墓地)に眠るピアフの墓前には、彼女の唄を愛した人々によって、いまでも美しい花が絶えないという。

僕らは、自分を情熱とフアイトあふれる熱血漢で、やりたい事は全部し尽くしたと思つてゐた。学生時代の四年間を終え、今度は社会で自分の力を試してやろうと意気揚々だった。ところが、社会へ出てみると、自分がとんだ遅まきだった事に気が付き始めました。想像と全く違つていた社会と、美大出身の身内から受けたカルチャーショックから自分が体当たり出来るものを見失ひ、僕のアイデンティティーは完全に崩壊しました。

自分を見詰め直し 第三の青春満喫中

裁判所 大竹 茂樹

巡査のマントを生を床として生まれ落ちたといわれている。写真にある玄関口の上に打ちつけられたプレートには「Sur les marches de celle maison naquit le 19 Décembre 1915 dans le plus grand dénuement EDITH Piaf dont la voix, plus tard, devait bouleverser le monde」(一九一五年十二月十九日。この家の階段で、極貧の内に誕生した女性・エディット・ピアフは、その後長じて、その声をもつて世界を震撼させた)と記されている。その

藤馬会を始めることができたことを、会員の皆様にとりわけ、それぞれに多忙な仕事をしておられる役員さん、幹事さん達の献身的なご助力がなかったら、この会も実現しなかったでしょう。藤馬ゼミに参加したという連帯感のもとに、先輩と後輩・現役とがお互いに旧交を温め合い、交流し合い、そして現役の学生諸君は経験豊かな先輩から就職問題や公務員試験などについて指導をうける場として「藤馬会」が今後ますます発展していくよう、念願しているところです。

僕も、これから何年度でも挫折することでしょう。(74年度生)

会の活性化へ努力を 事務局

大阪市役所 福塚 秀彰

「巨人軍は不滅です」と言つて、現役を引退したのは、長嶋茂雄。会社は永遠に不滅です」と言つて自殺したのは、日商の某重役。その組織に思いをかけた人では

いと言えない言葉かもしれない。今時、はやりはしません。組織が成長し、脱皮し、生きのびていくためには、その時代々々にあった姿を備えていく必要があるでしょう。

藤馬会もメンバーが増え、会の運営を体験した若い人も増えてきました。今後は色々な年次から、色々な人々に集まってもらふようにしなければなりません。そのための組織に変えていく必要があります。そのことが第一世代の最後の仕事でしようか。ほちほち、個人商店から株式会社組織へ脱皮する時かもしれませんね。(70年度生)